Small stories

まめふじ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｓｍａｌｌ　ｓｔｏｒｉｅｓ

【Ｎコード】
Ｎ３２５５Ｍ

【作者名】
まめふじ

【あらすじ】
一言から連想した短い小話たち。できる限り人名などはなくして、一人称＆いろいろ挑戦してみました。どれかひとつでも、お心に残りましたら、至幸にて。
小題名の熟語たちはチェビオット様からお借りしました。

曖昧

朝でも、夜でもない。空は夜明けなのか、陽暮れなのか判別しにくい。なんど見ても、見飽きることのない時間。人は起き出して、異形たちは眠りにつく。

そんななか、俺はひとり佇んで空を見る。縹の空に向かって、大あくびをひとつ。

「……ねむたい」

眠さも頂点に達する、曖昧な時間だ。

◇◆◇◆◇◆

異質

あたしは、人間だ。腕もある、足もある、目もあれば鼻もある。口を備え、耳で音をとらえる。だが、それがなんの役にたとうか。

こんな状況で、おのれが普通だと思える者が、どれほどいる。

まわりは異形、人外の存在ばかり。

ふつうなのが、異質なのだ。

《“普通”は不変ではない。“異質”も時として“普通”になるのだ》

異形の低い笑い声に、青年は脱力してしゃがみ込んだ。

◇◆◇◆◇◆

運命

暗闇の中、唐突にそのときは訪れた。

確固たる“個”を持っていなかった己が、急速に安定さを増していく。宿る本体が拾われ、あたたかな手でなでられた。

意志を与えてくれた主と別れて十余年。個を与えてくれたのは、幼い言霊だった。

「櫛姫、はじめまして」
出会ったのは、天の命か。おのが運か。いま、ようやく私は“私”になった。

◇◆◇◆◇◆
影響
「ねぇ、山童」
《なんだ》
「どうして雪童をずっと見てるの？」
《なにを言っている。我は雪童など、見ておらぬぞ》
「うーん。でもねぇ、ずうっと雪童をみてるもの」
《……見てはいない》
「じゃあ、どうしたの？」
《……なんでもない》
まさか、言えるはずがない。雪と戯れる同胞が、かわいかったからなど。

◇◆◇◆◇◆
重荷
物心ついてから、ぼくは「跡継ぎ」で「次代式主」だった。大丈夫って言われるたび、ぼくは泥の海を泳ぐ。ぼくの努力をわかって。ぼくの不安をわかって。ぼくの将来を決めないで。
おじいさまの跡を継ぐためだけに、生まれてきたんじゃない。
でも、ぼくはそれでも歩いていく。おじいさまから手渡された、大事な友達と一緒に。ぼくの次に、友達を紹介するために。

◇◆◇◆◇◆
家族
《休むか》
蒼い麒麟が声を掛けてくる。それに首を振って、青年は足を踏み

出した。正直、もう一歩も歩きたくない。だが、休めばもう歩けなくなりそうだった。
「仁琥様と約束したんだ。わたしにしかできないことをするって」
つらくないか、と麒麟は問う。青銅でできた人造の聖獣は、なんとも優美な姿をしている。幼い瞳に涙をため、それでも泣かずに送り出してくれた、店主。
青年は、笑って、首を振った。
「約束って、ひとを強くするんだよ」

◇◆◇◆◇◆

距離

いつも前には、あの方がいた。
振り返ることもしないで、歩き続ける。追いつけそうで、追いつけない。
私の尾が増えるたび、あの方の尾も増える。私の知識が増すたび、あの方の知識はもっと増える。
いまにも手につかめそうなほど近いのに、いつだって、あの方は私を残していく。私とあの方の間には、まぶたほどの距離がある。
《どうした、昊津(そらつ)》
あの方との距離は、とても遠くてとても近いのだ。

◇◆◇◆◇◆

苦難

「いーっつもね、同じ場所にいるってつらいのよ？」
少女は太陽のように笑う。空は雲に覆われ薄暗いというのに、少女のまわりだけを日差しが包んでいるようだ。
「わたしがいなきゃいけないっていうのはわかっているわ。みんなが困るっていうのもね。
でもね、わたしがいるのが当たり前になって、みんなわたしを見てもくれないわ。尊敬の念なんて、持ってもくれない。

あのね、“当たり前”なのって、“当たり前”なときは気づかないだけなのよ。消えちゃって初めて、“当たり前”だったんだって気づくの。それをみんな、わかってるのかしら」
寂しそうにいう少女に、青年は目線を合わせた。寂しそうでも、瞳は明るさを失っていない。それが、少女の性質なのだ。
「きみは偉大だろ。世界をまるまる包めるぐらい。でも、優しく包まれてるっていうのはわかるよ」
だから、と青年は続ける。
「できるだけ早く、空へ帰らない？　きみが空にいないだけで、こんなにも不安になる。――ね、陽女（ひめ）ちゃん」
「いやよ。もうちょっとだけ、夏洌に案内してもらうの！　そうしたら、帰るわ」
袖を引いて歩きだした少女に、青年は息をつく。そのまま、曇った空をみた。
まだまだ、空は晴れそうにない。

◇◆◇◆◇◆

景色

あなたの見る世界はいつも暗くて、かわいそうねって、あんたは言う。
たしかに、そうだ。俺には、空を飛ぶ鳥も海を泳ぐ魚も、地をかける獣も、流れる白い雲も見えない。
だがな、勘違いするなよ。昼のあんたには、絶対に見れない世界だってあるんだ。俺は、いつもその世界を見ている。透明な月の光も、ひそやかな木々の噂話も、鳥の夢も、獣の夢も。ぜんぶ、あんたには見えない世界だ。
あんたにはあんたの見る世界があるように、俺には俺の見る世界があるんだよ。
どうだ、羨ましいだろう。

◇◆◇◆◇◆

故郷

記憶の中には、故郷と呼べるものがない。そこだけ抜け落ち、違和感なく次がある。

わたしはどこで生まれ、どのように育ったのか。どんな親で、どんなふうに呼ばれていたのか。そのすべてが欠如し、わたしの中に存在しない。

それでも、わたしには故郷と呼ぶにふさわしいところがある。

「おはよう、金霊（かなだま）」

《おはよう、式主》

朝の挨拶を交わすたび、わたしの故郷は現れる。

◇◆◇◆◇◆

最後

軌跡をともなって、光が流れる。ずっと高い空で、星が燃えているのだという。あの光は永いときを経てきた星が、燃え尽きる光なのだ。

角鷹は右の翼で器用に盃を持ち、酒を飲む。隣に座した天狗も、それに倣った。

《星を見送りて酒を酌み交わすとは、はやく罪なことか》

《いやいや、すべては一興。一生すら一興にしかず》

《そはたしかに》

人外の存在にも、時間は等しく流れる。その流れを、どう受け取るかは、その者次第なのだが。こんこんと酒を飲み交わし、夜空を見上げる。鳥目ではないので、夜闇も苦とはならない。

天狗が、瓶子を傾けた。涙のように流れた酒は数滴。天狗はくつくつとくちばしで笑い、角鷹を見る。

《おや、酒がなくなりたり》

《そふや。には、また会はむ》

《いやいや、契りはせざりておこう》

《など、さることを言ふ》
《今夜が最後となりても、おかしくはなき》
《それもまた、一興か》
最後の一滴を大地に垂らす。また、酒を酌み交わすことができるよう期待を込めて。

◇◆◇◆◇◆

食事

気になることがある。この店に奉公に来てから、ずっと抱いていた疑問だ。
「異形って、なにを食うんですか」
一瞬、店の空気が止まった。手を止め、動きを止め、質問者に目線が集まる。すこし臆したものの、同じ言葉を繰り返す。
「異形って、なにを食うんですか」
「なにって……」
「食ってるだろう。そこらにあるもの」
「や、俺が言いたいのは……。ほら、たとえば獏とかは、夢しか食べないのかなって。しゃんしゃん火とか遊び火なんて、口すらないし」
「……そこは、アレだ」
「アレって、なんです」
手を止めていた一同が、番頭を見る。帳面をめくっていた番頭は、口ごもりながらも言う。
「気力でなんとかする」
「はぁ…」
なんとも説得力のない答えだ。あてにならぬと考えたのか、つぎつぎに考えが飛び出してくる。が、どれも説得力がない。
八方塞がりかとあきらめかけたとき、幼い店主が姿を現した。ここぞとばかりに、聞いてみる。
「なぁ仁琥。ちょっと聞きたいんだけど」

「なんでしょうか、夏洌さん」
「異形って、なにを食べるの」
「ふつうにご飯を食べますよ」
「遊び火とか金霊とかは……」
「そこは、気合いでなんとかするそうです」
ほれ見ろと番頭が胸を張る。脱力したのは、奉公人たちだ。
なんと御都合主義な異形たちだ。

（後書き）

チャレンジと称して、実験をしてみました。
携帯用タグを使ってみたのですが、不具合などがございましたら、
お教えくださいませ。
一応、異形屋の派生ということでございます。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3255m/

Small stories

2010年10月8日11時36分発行